

エジプト、サッカラ・ネクロポリスの展開を探る —エジプト、第6次・第7次北サッカラ遺跡調査(2023)—

河合 望 金沢大学新学術創成研究機構/古代文明・文化資源学研究所

Exploring the Development of the Saqqara Necropolis, Egypt: Preliminary Reports on the 6th and 7th Seasons of the Work at North Saqqara, Egypt (2023)

KAWAI, Nozomu Professor, Institute for Frontier Science Initiative/ Institute for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University

河合
望

1. はじめに

サッカラ遺跡は、前3100年頃の王朝の開闢により首都となり古代エジプト史を通じて行政の中心であった都市メンフィスの主要な墓地である。従来の当該遺跡での発掘調査は、サッカラ台地の上に造営されたピラミッド群や大型マスタバ墓をはじめとする初期王朝時代や古王国時代の王族やエリート墓の発掘調査が中心であり、20世紀末になってようやく新王国時代の墓地の発掘調査が実施されるようになった。一方で、新王国時代の国家神アメンの聖地であるテーベのネクロポリスの調査は約200年に及ぶ長い歴史があり、従来の新王国時代史はテーベの豊富な資料を中心に考察されてきたと言っても過言ではない(河合 2020)。このような状況に鑑みて、発表者は2015年度からサッカラ・ネクロポリスにおける新王国時代の墓地の調査研究を開始した。これまで踏査、測量調査、物理探査を行い、その結果、新たに新王国時代の墓地を確認するとともに、北サッカラ台地の東斜面に新王国時代の墓地が存在する可能性が高いとの結論に至った(Kawai 2021a)。そして、2017年に試掘調査を開始し、新王国時代第18王朝に年代づけられる遺物を包含する層を確認したが、同時代の遺構の検出には至らなかった(図1)。そして、2019年に実施した2回の発掘調査では、グレコ・ローマン時代のカタコンベ(地下集団墓地)を発見した(図2)(Kawai 2021b)。これを受け、北サッカラ遺跡の発掘調査による古代エジプトの埋葬文化の変容を新たな調査目的とした。そして、コロナ禍による約4年間の調査の中断の後、2023年8月に再び本格的な発掘調査を再開し、新王国時代の墓を含む初期王朝時代からローマ支配時代にかけてのさ

まざまな時代の墓を検出した。本発表では、カタコンベの発掘調査の準備を行った第6次調査と4年ぶりの

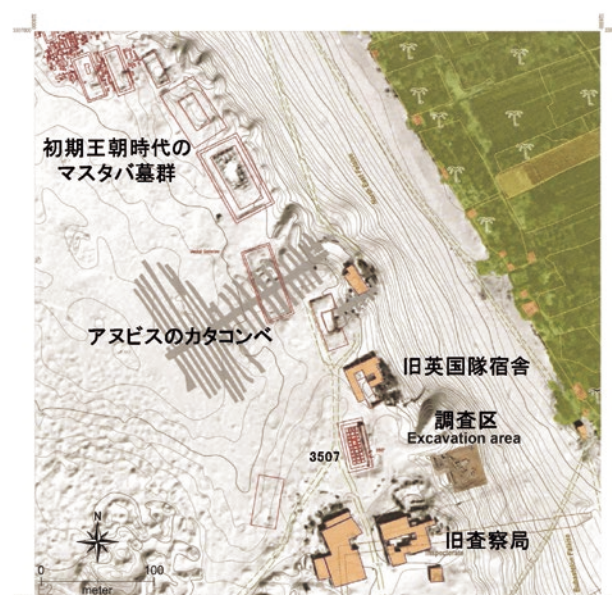


図1 調査区周辺地図(The North Saqqara Archaeological Sites: Handbook for Risk Analysis, 2012 を改変)



図2 カタコンベ外観



図3 カタコンベ北側エレベーション(オルソ画像)

本格的な発掘調査を実施した第7次調査の概要を報告する。

2. 第6次調査の概要

2019年度の第5次調査で発見されたカタコンベは、グレコ・ローマン時代のメンフィスの人々の埋葬習慣を明らかにする上で極めて重要な遺構である。コロナ禍後の最初の調査となる第6次調査は2023年2月から3月に実施され、カタコンベ内部の天井の崩落を防ぐための保護フレームの設置作業開始前の記録と設置作業、そして第7次発掘調査の準備調査を行った。

カタコンベ発見時に岩窟部内部を観察したところ、天井から各所で岩盤が崩落し、大きな岩塊が通廊を塞いでいた。今後の内部のクリーニング調査を実施するためにまず天井から岩盤が崩落するのを防止するため、鉄製の保護フレームを設置することが喫緊の課題であった。第6次調査では、TOPPANの支援を受け、鉄枠設置前のカタコンベの状況の三次元レーザー測量を実施し、同時にフォトグラメトリによる三次元モデルの作成を行った(図3)。これらの記録作業と同時にカタコンベ内部の観察を行い、側室、タブロー、ステラ(石碑)、壁画、グラフィティの調査を行った。南壁に嵌め込まれたステラに彫られたギリシア文字の碑文から、東側からそれぞれメネシテア、ヘロイデス、アンモニアという名の人物に捧げられたものであることが明らかとなった(図4)。カタコンベ内部の保護フレームの柱を設置するため数カ所で部分的なクリーニング作業を行ったところ、入口付近からテラコッタ製のイシスアフロディーテ女神像2点と女神の冠の像が出土した(図5-1、2、4)。また、カタコンベ内の埋葬に伴う完形の土器は多くが所謂「Cooking Pot」と呼



図4 カタコンベ南壁のタブローとステラ

ばれる壺形土器であり、前1世紀から1世紀頃に年代付けられる。

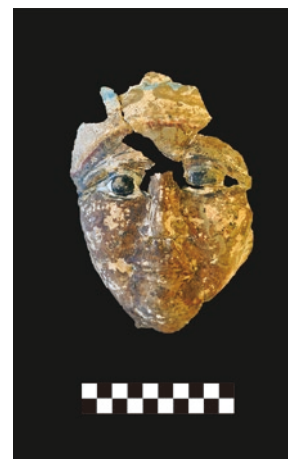
3. カタコンベのクリーニング

2023年8月から9月に実施した第7次調査の優先課題は、第6次調査に引き続きカタコンベ内の保護フレームの設置作業であった。まず、作業が終わった入口部付近のR1-R2、L1-L2でクリーニングを実施した。今次調査では、地表面から砂層を約1m掘り下げ、カルトナージュ製の女性のミイラマスク(図6)、テラコッタ製のイシスアフロディーテ女神像(図5-3)、ガチョウに乗るハルボクラテス像(図5-5)、ローマンランプ、ウンゲタリウムと呼ばれる瓶形土器などが出土した。また、北壁からはカタコンベ外由来の石材が緑の部分を石膏プラスターで塗られた状態で検出されており、おそらく側室の入口の封鎖壁であると考えられる。また、南壁では新たにギリシア文字のグラフィットが発見された。この部分の砂層の堆積は床面まで約1mあると想定される。

カタコンベの内部では男性のものと見られるカルト



図5 カタコンベ入口付近から出土したテラコッタ製像

図6 女性のカルトゥナー
ジュ製ミイラマスク図7 男性のカルトゥナー
ジュ製ミイラマスク

ナージュ製のミイラマスクがミイラの顔部を覆っている状態で確認され(図7)、さらに南壁西部の壁画は側室の入り口の封鎖壁の上に描かれていることが判明した。

4. マスタバ・エリアの発掘調査

第7次調査では、カタコンベ内部の保護フレームの設置作業の間に、カタコンベに上部からの土砂が流れ込まないようにカタコンベの穿たれた崖上のクリーニングを実施した。クリーニング中に日干レンガ製の壁体とシャフトと思われる矩形の窪み(R-031)が検出されたことから周辺の発掘調査に着手した(図8、9)。シャフトと思われる遺構の西側の壁体を精査したところ、周囲の初期王朝時代のマスタバの日干レンガと同規格の日干レンガからなるマスタバの一部と考えられる壁体を確認され、その外側にそれよりもやや大きな規格の日干レンガの壁体が石灰岩ブロックの壁体の上に積まれている様相が確認された。そして同様の壁体は南側と東側にも認められ、壁体の面の下部の延長線上に垂直に掘削された岩盤があることから、これらの壁体がシャフトの壁体であることが判明した。シャフトの北壁は未発掘であるが、東西の幅は2.6 m あり、南北の幅はそれ以上の長さになることから、類例から考えると末期王朝時代の大型シャフトと推定される。このシャフトの発掘調査は次期調査に行う予定である。なお、前述の初期王朝時代のマスタバ墓の壁体の一部については、今後遺構の範囲を精査する必要がある。

さらに西側に発掘区を拡大したところ、シャフトの南西から16基の土墳墓が検出された。最も残存状況が良好な土墳墓(R-042)は、長さ185 cm、幅21 cm～



図8 第7次調査発掘エリア・オルソ画像平面図



図9 第7次調査発掘エリア外観



図10 R-042 出土、土製ミイラマスク

31 cm の木棺に収められたミイラマスクを被る仰臥伸展葬の遺体が検出されたものである。ミイラマスクの鬘が黄色の下地に赤と青のストライプで装飾されていることから、おそらく第25王朝からプトレマイオス朝時代の間に年代づけられる(図10)。その北隣には、新王国時代第18王朝前半に特徴的な複数の土器を伴う東西約2.2m、南北0.8mの土壙墓が検出された(R-043)。遺体はほとんど残存していなかったが、遺体を収めていた木棺の一部が残存しており、木棺の表面を装飾していた彩色プラスターが日干レンガに張り付く形で確認された。装飾パターンから、リシ棺が納められていた可能性が高い。周辺にあるいくつかの土壙墓も切り合い関係から判断すると第18王朝に年代付けられる。

これらの土壙墓群の東側からは東西方向で長軸2.26m、南北方向で単軸1.5mを測る矩形の日干レンガ製の墓(R-051)が検出された(図11)。遺構の壁体上部に残存する日干レンガの積み方から、墓には本来ヴォールト天井があったと推察される。遺構内より出土した2点の完形土器の年代から墓はプトレマイオス



図11 プトレマイオス朝時代の日干レンガ墓の埋葬



図12 初期王朝時代第2王朝頃の岩窟墓屈葬遺体出土状況

朝時代に年代付けられる。矩形の遺構の中央にはレンガ列があり、レンガ列を外すとその下に男性の遺体の埋葬が確認された。

5. カタコンベ南エリアの発掘調査

2019年度の第5次調査では、第3次調査の試掘トレンチとカタコンベの間の部分は掘り残した状態であったため、第7次調査の課題としてカタコンベ南側の発掘調査を実施した(図8、9)。

カタコンベから南側に約5mに位置する石灰岩の露頭からは、奥行き約130cm、幅95~130cm、高さ70~80cmを計る小型の岩窟墓が検出され、内部にはすでに風化した箱形木棺に収められた屈葬の遺体が確認された(R-057)(図12)。共伴したエジプト・アラバスター製の皿は初期王朝時代第2王朝頃に年代付けられた。前述のmastaba・エリアでも壁体の一部が確認されたように、北サッカラ台地の東端部には初期王朝時代の高官の大型mastaba墓が位置している。今回の発見により、初期王朝時代には斜面にも墓が造営されていたことが明らかとなり、初期王朝時代における墓

地の形成について新知見を得ることができた。

第2王朝の岩窟墓の南には尾根状の斜面がある。この斜面を掘り込んだ土壙墓が10数基検出された。特に特徴的な土壙墓は、土壙墓群で最も西側に位置するR-052と呼称される楕円形状の土壙墓である。南北方向で長軸約2.3m、東西方向で単軸0.9mを測る。土坑内には仰臥伸展葬で頭位方向が北西で顔を東側に向けた人骨が収められ、その横で本来遺体を覆っていたと見られる彩色木棺の破片が検出された。この木棺片は、特徴的な羽根状の黒点が施された装飾から、第17王朝から第18王朝初期に特徴的なリシ棺の破片であり、サッカラ・ネクロポリスでは2例目である。木棺の底板に接する付近からは蓋付の壺、口縁部が黒く彩色された赤色土器、キプロスやレヴァント由来のBase Ring Ware、リュトン形のエジプト・アラバスター製石製容器、ドームヤシが出土した。これらの遺物からこの土壙墓の埋葬は第18王朝初期に年代付けられる。その他の周囲のいくつかの土壙墓も第18王朝に年代付けられることから、当初の目的である新王国時代における墓地形成の問題に適う発見となった。

その他周囲からはR-061やR-064といった幼児が埋葬された土壙墓も検出された。R-061は幼児の遺体をシルト(沖積土)泥で矩形に覆った土棺であり、土壙の切り合い関係から第18王朝に年代付けられる可能性が高い。また、R-061では足元に置かれた特徴的な青銅製腕輪からプトレマイオス朝時代の幼児埋葬である可能性が高い。

これらの土壙墓群のある尾根の上層の表層からはローマ支配時代の単純埋葬が複数検出された。これらは深い土壙を掘った墓ではなく、表層あるいは浅い土壙を掘って遺体を埋葬したものである。ミイラ化された遺体に亜麻布を巻いたものからミイラ化せずそのまま遺体を埋葬したものなど埋葬様式は多様であった。

さらに土壙墓群の南側には斜面を人為的に垂直に切り落とした部分があり、一部日干レンガ製の壁体を垂直に削っている(図8)。この南側には硬くしまりのある床面のような水平面があり、何らかの遺構の前庭部である可能性が高い。この部分の性格については今後

の調査で明らかにする予定である。

6. まとめと今後の展望

2019年の第5次調査では、グレコ・ローマン時代のカタコンベが検出されたが、約4年ぶりの発掘調査となる第7次調査では周辺から初期王朝時代第2王朝からローマ支配時代に及ぶさまざまな時代の墓を発見することができた。調査の成果は、サッカラ・ネクロポリスにおける墓地の形成と展開について新たな知見をもたらすものとなった。まず、初期王朝時代の岩窟墓は従来調査が行われてこなかったサッカラ台地の東側斜面から検出されたものであり、初期王朝時代の墓域の分布を再考する契機となった。新王国時代第18王朝初期の複数の土壙墓も、従来確認された同時代の土壙墓群よりも密度が高く、新王国時代における墓地の形成についても新知見がもたらされた。今後の発掘調査と研究により、初期王朝時代からローマ支配時代にかけての古代エジプト約3400年間の埋葬文化の変容を明らかにしていきたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「エジプト、サッカラ遺跡の調査による古代エジプトの埋葬文化の変容に関する総合的研究」(研究代表者：河合望(金沢大学)、課題番号：23H00014)の助成を受けて実施された。また、TOPPANより三次元レーザー測量とGNSS測量のご協力を賜りました。記して感謝いたします。

参考文献

- ・ Kawai, N. 2021a Exploring the New Kingdom Tombs at North Saqqara: Preliminary results of the Archaeological Survey from 2016 to 2017, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 245–262, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・ Kawai, N. 2021b A Newly discovered Roman catacomb at North Saqqara: Recent results and future prospects, In M. Bárta, F. Coppens, J. Krejčí (eds.) *Abusir and Saqqara in the year 2020*, 331–346, Prague, Faculty of Arts, Charles University.
- ・ 河合 望 2020「サッカラ遺跡における新王国時代の墓地の分布と新たに発見された墓地について」吉村作治(編)『オシリスへの贈り物 エジプト考古学の最前線』30–39頁 雄山閣。